

祝「佐伯史談」二百号

副会長 小野英治

佐伯史談第一号は昭和四十年（一九六五）一月二十五日、羽柴弘先生のガリ版刷りで発行されている。

羽柴先生は「創刊について」で「これがどこまで続けられるか、私としては実はいくつかの不安をもっています。」として、会員の寄稿、鉄筆による原稿切りや印刷他の時間等をあげられている。

当時の佐伯史談会は羽柴先生の献身的な奉仕活動によって運営維持されていたといっても過言ではない。それは百二十二号の昭和五十五年四月活版印刷に移るまで続けられたのである。

第一号で注目したのは「新春初巡り」で一月二日弥生の尺間と大坂本の古塔を私を含む四名で探訪した報告

で、今もなつかしく思い出されるが、羽柴、片刈、伊賀の三名は他界し、四十年の時間を感じさせる。

なお、第八号から十七号に『豊後佐伯城の研究』を発表させていただき、昭和四十四年第七十九号で論説『三ノ丸御殿について』で貴重な江戸時代の城郭居館遺構として保存を呼びかけたのですが、当時の池田市長は“日本の歴史を変えたような事件の舞台となった建物でなければ保存は考えられない”としてこれを取壊し、文化会館を建設されました。

三ノ丸御殿は船頭町で住吉御殿として移築されましたが、文化財としての価値は半減し、三の丸の景観は最悪となり今日にいたっています。佐伯史談会の力だけではどうしようもなかったことが残念でなりません。

佐伯史談が二百号を迎えられたことは第一号を発行された羽柴先生をはじめ諸先輩方の尽力の結果でありますから、私達はその志を引継いで“継続は力“を実践したいものです。

